

## クリミヤ汗ヌル=デウレットとロシア

その他のタイトル	The Crimean khan Nurdevlet and Russia
著者	中村 仁志
雑誌名	関西大学文学論集
巻	68
号	2
ページ	17-33
発行年	2018-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/16307">http://hdl.handle.net/10112/16307</a>

# クリミヤ汗ヌル=デウレットとロシア

中村仁志

はじめに

本稿で考察の対象としてとりあげるヌル=デウレットは、15世紀後半にクリミヤ汗国の汗であった人物である。汗位を失った後、クリミヤを去ってロシアにおもむき、ロシア内のタタール人国家の君主となり、その地で生涯を終えることとなる。

15世紀、キプチャク汗国の分裂・解体にともなって、その領域内にカザン汗国、大オルダ、アストラハン汗国、ノガイ・オルダなどの一群のタタール人国家が叢生した。クリミヤ汗国は、この過程のなかで生まれたキプチャク汗国の継承国家の一つであり、クリミヤ半島の北部を中心として成立した。剽悍な騎兵集団を擁するクリミヤ汗国は、近世の東欧の勢力図において重要な一角を占めていたが、18世紀に黒海北岸に南下してきたロシア帝国によって併合され、その領土の一部となった<sup>1)</sup>。

ヌル=デウレットはクリミヤ汗国の創設者の息子であり、1466年に2代目のクリミヤ汗の地位に就いた。しかし、ほどなく弟とのあいだに汗位争いが勃発、10年ほどもつづいた内訌の末、敗れたヌル=デウレットはクリミヤをあとにする。1470年代末にロシアの地に来たヌル=デウレットは、その後、ロシアの支配者であったモスクワ大公イヴァン3世の手でカシモフ皇国なる国の君主の地位にすえられる。

カシモフ皇国は、モスクワの南方を流れるオカ川の流域につくられたロシアの従属国であった<sup>2)</sup>。チンギス汗の血統者を君主としていただくタタール人国家であるという点では、クリミヤ汗国やカザン汗国などのキプチャク汗国の継

承国家と共通する性格をもっていた。かつてのクリミヤ汗ヌル＝デウレットは、カシモフ皇国の支配者となり、ロシアの君主に仕える勤務タタール人たちを率いるようになった。

カシモフ皇国のようなタイプのタタール人国家がロシアの領内に設立されたということからうかがえるように、キプチャク汗国が解体していくなかで、チンギス汗の血を引くタタール人の貴種が数多くロシアに移り住むようになった。彼らがロシア史上はたした役割については、2011年にベリャコフが『15—17世紀のロシアにおけるチンギス汗の血統者たち—プロソフオグラフィー研究』<sup>3)</sup>を著わしたように、近年、関心が高まりつつある<sup>4)</sup>。

ロシアの地に足を踏み入れた、あまたのチンギス汗の子孫たちのなかでも、ロシアに到来する前はクリミヤ汗国、到来後にはカシモフ皇国と、二つのタタール人国家の君主になったヌル＝デウレットは、一頭地を抜く存在であった。本稿では、ヌル＝デウレットの経歴に焦点を当てながら、15世紀後半のロシアとクリミヤ汗国の関係、ひいてはロシアとタタール人世界とのかかわり方の変化をあとづけていく。

## 1 クリミヤ汗国の成立と内訌

13世紀にバトゥを総大将とするモンゴルの西方遠征を契機として設立されたキプチャク汗国は、遊牧国家の伝統である左右両翼体制をとっていた。ヴォルガ川の下流にあって、キプチャク汗の居所がおかれた都のサライが全体の中心の位置を占め、南面して左にあたる東方が左翼、同じく右にあたる西方が右翼を構成し、キプチャク草原と呼ばれた大草原地帯に汗の傘下にある遊牧民の諸集団が配置されていた。

キプチャク汗国の分裂は漸次進み、左翼においては、14世紀の末から15世紀のはじめにかけ、汗国きっての実力者であったエディゲイにより独立勢力としてのノガイ・オルダが形成され<sup>5)</sup>、その部衆はヴォルガ川の東方で遊牧生活を営んだ。一方、右翼では、1440年代にハジー＝ギレイによってクリミヤ汗国が

建てられ黒海北岸の草原地帯を支配するようになった。また、北方の森林地帯においてもロシアが、キプチャク汗に対する従属、すなわち「タタールのくびき」<sup>6)</sup>からの自立の道を歩むようになった。

左右両翼、ならびにそれ以外の地域でもみられた自立への動きに対し、サライを含め、往時のキプチャク汗国のほぼ中央部にあたる地域を支配領域とした大オルダ<sup>7)</sup>の汗は、キプチャク汗の直接の後継者をもって任じ、かつてキプチャク汗の威令に服していた諸勢力に対するヘゲモニーを、ふたたび打ち立てようとした。

そうした勢力と威信の回復のための活動の一つが、ロシアに対する軍事遠征であった。大オルダは、モスクワ大公のもとで統一と集権化をすすめる「タタールのくびき」のもとからのがれようとしていたロシアを、自身の隷下につなぎとめるため襲撃をくりかえした<sup>8)</sup>。

また、大オルダの汗は、かつてのキプチャク汗のように、他のタタール人国家の支配者たちに対し、宗主としての立場から影響力をおよぼそうとした。しかし、自立の道を歩むタタール人国家の君主たちが、唯々諾々とそれに従うはずもなかった。わけでも、クリミヤ汗国の創設者であったハジー=ギレイは、大オルダと真っ向から対立した。1465年、ハジー=ギレイのクリミヤ軍は、ロシアを襲撃すべくドン川の河畔にまで進出してきた、大オルダのマフムード汗の軍勢を撃破した。これによってマフムードは配下の部衆に対する権威をいぢるしく失墜し、これと入れ替わるようにして弟のアフメト（アフマート）が大オルダの指導的立場につくようになった<sup>9)</sup>。

おりしも、クリミヤ汗国においても大きな変化が生じた。1466年、汗国の創始者であったハジー=ギレイが死亡し、長男のヌル=デウレットが汗位を継いだのである。ヌル=デウレットはあらたな汗となるにあたり、大オルダのアフメト汗にヤルリクを求めた<sup>10)</sup>。ヤルリクとはキプチャク汗が、宗主の立場から下位の君侯に対し、その地位を認めるべく発する勅許であり、ロシアの歴史においては諸公中の第一人者である大公に対して与えられたヤルリクがよく

知られている。

すなわち、ヌル=デウレットは、形式的には大オルダの汗を自己の上位者としてあつかい、下位者たる自分のクリミヤ汗位を承認するよう求めたのである。これは、いったい何故か。父のハジー=ギレイが自立の道を模索していた姿を見ていたヌル=デウレットには、大オルダの汗に、かつてのキプチャク汗が有していたような権威を認め、そのもとにひざまづくようなつもりは、なかったであろうに。

ここで、考えるのは、実質的な隷属ではなく、形式的な服属である。大オルダの汗を上位者としてあつかうといっても、その前提となるのは、あくまで複数のタタール人国家の独立であり、それらの国々がゆるやかに連合する際の束ね役、名目上の筆頭者としては、大オルダの汗を立てるべき、という程度の尊重の仕方ではないか。キプチャク汗国が解体していくなか、一挙に混とん状態に陥るのは避け、タタール人の諸勢力のあいだに一定のまとまりを保とうとすれば、現実的な方策といえる。

また、対外的な配慮という点からすると、ヌル=デウレットがヤルリクを求めたのは、クリミヤから大オルダに向けての一種の和解の試みとも解しうる。1465年にハジー=ギレイのクリミヤとマフムードの大オルダが戦った結果、両勢力は深刻な敵対関係に陥った。この状況にかんがみれば、両国でともに新しい支配者が登場したのに合わせて関係を改善し、緊張緩和をはかるのは、時宜を得た措置と考えられる。

さらに、国内的には、大オルダの汗のヤルリクには、一種のお墨付きとしての効果があると期待されたのであろう。先代のハジー=ギレイはクリミヤ汗国建国以来、約20年にわたって君臨し汗国の土台を作り上げた。さらに、死の前年には大オルダを破るというめざましい戦功をあげている。これほどの大君主が死亡した後には、権力の空白が生じざるをえない。それを、少しでも埋めるため外部の権威を求めたのである。ヌル=デウレットは、キプチャク汗の後裔<sup>11)</sup>であった大オルダの支配者の承認を背景として、クリミヤにおける君主権

力の安定化をはかったのである。

しかし、この目論見は、失敗に終わる。クリミヤにおけるヌル=デウレットの君主の座は安泰どころでなく、ほどなく、弟のメングリ=ギレイとのあいだに汗位をめぐる争いが勃発する。以降、ヌル=デウレットとメングリ=ギレイの骨肉の争いを軸とするクリミヤの内乱は、1470年代末までつづき、その間、汗の交替がくりかえされるといふ事態となった<sup>12)</sup>。

長引くクリミヤの内訌は、クリミヤ汗国に対する影響力を強めようとする外部勢力に対し、かっこうの機会を提供した。この時、クリミヤにおける政治的混乱を利用して実際に介入し、汗位の行方を左右したのは、大オルダとオスマン朝である。

そのうち、君主家がチングス汗の家系に属していた大オルダには、汗位を争うクリミヤの兄弟の一方に加担するというかたちで介入する以外に、自身の家門の一員をクリミヤの君主の座にすわらせる、という方法も可能であった。大オルダのアフメト汗は、ヌル=デウレットにヤルルイクを与えて彼を支持する、当初の路線から、自身が推す候補をクリミヤの支配者にする方向に転換し、自分の甥（一説には息子）のジャンベクを1476年ころクリミヤの汗位につけたのである<sup>13)</sup>。

これに対し、クリミヤの汗位への自前の候補を擁さず、もっぱら汗位を争う一方の側を支援し、彼を汗の座につけることによってクリミヤに統制をおよぼそうとしたのが、オスマン朝である。コンスタンティノーブルの征服者として名高いメフメト2世の時代、オスマン朝はクリミヤ半島の南岸を征服した。これによって黒海北岸への足がかりをえたオスマン朝は、1478年メングリ=ギレイを支援してクリミヤの汗の座につかせたのである。

一方、ヌル=デウレットである。1477年にジャンベクに代わって汗位への返り咲きをはたしたものの、翌年にはオスマン朝の支援を受けた弟のメングリ=ギレイに汗位を奪われたヌル=デウレットは、1478年の末ないし翌年はじめころリトアニアにのがれた<sup>14)</sup>。

中世にはバルト海から黒海方面にかけての広大な地域を支配下におき、1386年からはヤギェウォ（ヤゲロー）朝のもとでポーランドと連合していたリトアニアは東欧の大国であった<sup>15)</sup>。クリミヤとの関係からしても、ハジー＝ギレイがクリミヤ半島で権力を掌握してクリミヤ汗国を樹立するのを助けている<sup>16)</sup>。ヌル＝デウレットとしては、父の代から自国と深いかわりをもっていたリトアニアからの支援を得て、クリミヤの汗位への復帰の足がかりをつかみかけたのであろうが、ことは思うようにはすすまず、短期間の滞在でリトアニアを後にすることになった。

ついでヌル＝デウレットがむかった先がロシアであり、ここにヌル＝デウレットのロシア時代がはじまることになる。

## 2 カシモフ皇国の君主としてのヌル＝デウレット

ヌル＝デウレットは1479年秋には弟のアイダルとともにモスクワ大公国に來た。ヌル＝デウレットらがモスクワに到來した理由については、彼ら自身のイニシアチブによるものか、モスクワ大公イヴァン3世の招致によるものかは不明とされるが<sup>17)</sup>、クリミヤを去り、リトアニアでもところをえなかったヌル＝デウレットとしては、ロシア以外に、ある程度の厚遇を期待できる場所は、多くはなかったであろう。

はたして、ヌル＝デウレットは1503年に死亡するまで20余年にわたってロシアの地にとどまることになる。リトアニアでの滞在期間の短さとは好対照であり、ヌル＝デウレットにとってロシアでの待遇は、それなりに満足できるものであったのだろう。

では、彼を受け入れたロシアの側の事情はどうか。ロシアにとってヌル＝デウレットは、どのような利用価値があったのか。かつてのクリミヤ汗たるヌル＝デウレットは、当時のロシアの支配者であったモスクワ大公イヴァン3世にとっては奇貨とみなすべき存在であった。おりからロシアがすすめたクリミヤと同盟して大オルダに対抗するという外交路線のなかで、ヌル＝デウレットは

枢要な役割をはたしうる人物として期待されたのである。

一方、クリミヤにとっても始祖のハジー=ギレイ以来、大オルダは、危険な隣人であった。とくにメングリ=ギレイ汗にすれば、大オルダのアフメトはジャニベクという独自の候補を擁立してクリミヤ汗国における汗位争いに介入してきた相手であり、クリミヤにおける自分の支配者としての地位を脅かす不倶戴天の敵であった。そこから、おのずとメングリ=ギレイのクリミヤは、大オルダの脅威を前にしていたもう一つの勢力であるイヴァン3世のモスクワとの同盟へと向かうことになる。このモスクワ=クリミヤ連合が奏功したのが、「ウグラの対陣」である。

1480年、アフメト汗のひきいる大オルダのタタール軍がロシアにむかって進撃してきた。ウグラ川の河畔に達したアフメトは、対岸に陣を張るロシア軍と対峙するかたちとなった。タタール軍とロシア軍はウグラ川をわたって戦いに突入することがないまま10月から11月にかけて、ひと月にわたってにらみ合いをつづける。

結局、アフメトは当時、同盟を結んでいたリトアニア軍の参着がないままにロシア軍相手に戦端を開く踏ん切りがつかず、ウグラ川から兵をひく。これが「タタールのくびき」の終えんをもたらしたとしてロシア史上有名な「ウグラの対陣」である<sup>18)</sup>。この時、大オルダに加勢すべく進撃してきたリトアニアの軍勢を牽制してアフメト軍との合流を妨げるなどしてイヴァン3世を支援したのがクリミヤのメングリ=ギレイであった。

「ウグラの対陣」の翌年、アフメト汗はシベリアのチュメニの汗イバクとノガイ・タタール人の急襲を受けて敗死する。大オルダにとっては、大きなダメージであった。しかし、その後も、アフメトの遺児たち<sup>19)</sup>にひきいられた大オルダのタタール人勢力は、モスクワとクリミヤにとり、あなどりがたい敵手でありつづけた。とりわけ1486—91年にかけてクリミヤ=ロシア陣営と大オルダのあいだで激しい戦いがくりひろげられた。この戦いのなか、メングリ=ギレイは一時本拠のクリミヤ半島に攻め込まれるという厳しい局面も経験した



が、戦い抜いて最終的勝利をおさめた<sup>20)</sup>。

この大オルダとの戦いに符節を合わせるようにして、である。ヌル=デウレットがカシモフ皇国の君主の地位についたのは、カシモフ皇国は、イヴァン3世の父のヴァシーリー2世の時代に設立された、ロシアに従属するタタール人国家であり、その始祖はカザン汗国の汗家の一員であった皇子カシムであった<sup>21)</sup>。カシムの没後、あとを継いだ息子のダニヤルが1486年に死亡すると、王家の血統は断絶した。そこで、同年これを引き継ぐあらたな王朝の初代の君主として白羽の矢を立てられたのが、ヌル=デウレットである。

翌1487年より、カシモフの汗、ヌル=デウレットは毎年のように大オルダとの戦いに出撃するようになった。イヴァン3世はクリミヤ汗国のメングリ=ギレイと連絡を取り合いながらヌル=デウレットに指令を發して、クリミヤ勢との連携で大オルダを攻めさせた。かくして、かつてクリミヤの汗位を争ったヌル=デウレットとメングリ=ギレイの兄弟は、あい呼応しつつ大オルダとの戦いの矢面に立つこととなったのである。

ヌル=デウレットは、ロシアにとっては、タタール軍をひきいて大オルダと戦う野戦軍の司令官としての役割をはたしただけでなく、外交面、特に対クリミヤ外交において大きな価値を持っていた。クリミヤのメングリ=ギレイはロシアのイヴァン3世と結んで大オルダと戦ったが、クリミヤにとってはモスクワとの同盟のみが唯一の外交方針というわけではなかった。クリミヤ汗国には、始祖のハジー=ギレイ以来、関係が深かったリトアニアと組んでロシアに対抗するという選択肢もあり得たのである。

ロシアにとってはクリミヤを自国との同盟につなぎとめておくことは、外交上の重要課題の一つであり、クリミヤの汗に対しては、かつてのキプチャク汗に対するがごとき最上級の礼遇をもつてのぞんだ<sup>22)</sup>。その一方、クリミヤのメングリ=ギレイが反ロシア的行動に出るのを阻むべく、それに対する抑止力としてヌル=デウレットの存在を利用した。もし、メングリ=ギレイがロシアとの同盟を解消しようとするれば、ヌル=デウレットを押し立ててクリミヤの汗位の

交代を図ればよい。メングリ=ギレイの兄で、かつてクリミヤの汗でもあったヌル=デウレットは、汗たる資格においてはメングリ=ギレイと比べても遜色なかったのであるから。

また、クリミヤの汗位につくための資格ばかりでなく、実力においてもヌル=デウレットは侮りがたい存在であった。メングリ=ギレイとの汗位争いに敗れてクリミヤをあとにしたヌル=デウレットには、貴族・平民の戦士などからなる一群のタタール人が随従していた。言わば亡命勢力であるが、この一団だけならば、メングリ=ギレイにとって、さほど大きな脅威ではなかったであろう。しかし、ヌル=デウレットはロシアでカシモフ皇国の君主となり、カシモフのタタール勢を従えることになった。

しかも、ヌル=デウレットは、名前ばかりのカシモフの支配者になったのではない。毎年のようにくりかえされる大オルダとの戦いのなかで、クリミヤ以来のヌル=デウレットの郎党と、あらたに彼の配下となったカシモフ勢は融合して一つの軍事単位となっていく。かくして強力になったタタール人部隊を引きつれ、それにくわえてロシア軍の支援をも受けたヌル=デウレットが、君主の座にもどるべくクリミヤにむかったならばどうか。弟メングリ=ギレイにとってかわり、兄ヌル=デウレットがクリミヤの汗位に復帰する可能性は十分にあったであろう。

一方、メングリ=ギレイの側からすれば、ロシアのイヴァン3世が同盟者としての友誼を示しつつ、クリミヤの君主の地位を脅かしうる切り札をにぎっていたのであるから、心中は複雑である。さりとて、何の対応策もとらないまま事態を看過しておくわけにはいかない。メングリ=ギレイは、イヴァン3世に対し、兄ヌル=デウレットをクリミヤに戻すよう申し入れるが、いんぎんな断わりにあう<sup>23)</sup>。ヌル=デウレットは潜在的なクリミヤ汗の候補者としてロシアの地にとどまりつづけたのである。

### 3 晩年のヌル=デウレット

ヌル=デウレットは、1490年に、おそらく健康上の理由により、大オルダとの戦いの第一線から退いた<sup>24)</sup>。このため、カシモフ皇国の支配者、ならびにタタール人部隊の軍事指導者としての役割は、あとを継いだ息子たちによって担われることになる。ヌル=デウレットには、3人の息子がいたが、長男は父親とともにロシアに来てまもなく1480年に死亡していたため、残った息子のサティルガンとジャナイが、あいついでヌル=デウレットの後継ぎとなった<sup>25)</sup>。

まず、サティルガンである。1490年にヌル=デウレットが対大オルダ戦役の第一線に立たなくなると、サティルガンが父に代わって軍の指揮をとるようになったが、いきなり重大な失態を犯す。メングリ=ギレイからの必要な連絡が来るのをまたずに、カシモフに戻り、クリミヤとの連携作戦に齟齬をきたしたのである。

一方、クリミヤのメングリ=ギレイにとっても、ヌル=デウレットからサティルガンへの交代は、小さくない意味をもっていた。メングリ=ギレイからすれば、対大オルダ戦の同盟者はロシアの君主イヴァン3世である。ロシアに従属するカシモフ皇国の君主は、あくまでイヴァン3世の臣下にすぎず、メングリ=ギレイにとっては対等の相手ではない。というのが筋であるが、それは、あくまで建前のうえでの話である。相手が、兄でありライバルでもあったヌル=デウレットとなれば、自分と同等、そしてある点では、それ以上の存在とみなさざるをえない。

ところが、相手がサティルガンならば、メングリ=ギレイにとっては甥である。しかも、タタール軍をひきいるようになってそうそう、クリミヤとの連携行動に失敗するというミスを犯し、経験不足を露呈している。メングリ=ギレイとすれば、叔父として、そして戦場における先達としての貫録を示しながら、若輩の甥を導くという姿勢で臨めばよかったのである。

サティルガンは、カシモフ皇国の支配者としても、微妙な立場に置かれてい

た。父ヌル=デウレットは、戦場に立てなくなり君主の地位からしりぞいたとはいえ、いまだ存命であった。いきおい、サティルガンとしても、その意向を付度せざるをえない。サティルガンは、父の名代表的な立場でカシモフの玉座にすわっていたのである。

1501年から1503年にかけて、サティルガンの身柄はカシモフからモスクワに移され、そこで拘禁状態におかれた。ロシアの君主に無断で、外国勢力と交渉したというのが、彼に科された罪状であった。ラヒムジャノフは、この時のサティルガンの交渉相手はメングリ=ギレイの息子たちであったと推測している<sup>26)</sup>。サティルガンと彼らは従弟の間柄であり、長きにわたってクリミヤとカシモフに君臨（あるいは退位しても存命）している父親世代の重みを頭上を感じている者同士という共通点があった。いずれ来たるべき自分たちの時代にむけて語り合おうとしたのであろうか。

ヌル=デウレットは、1503年にこの世を去った。それにともないサティルガンはモスクワにおける拘禁を解かれ、カシモフ皇国の君主の地位に復帰する。この措置は、一種の恩赦と解されている<sup>27)</sup>。ロシアの君主の秘密裏に外国勢力との交渉をもった場合、反ロシアの目的、通敵の意図が露見したならば、赦免の余地があるはずはない。それゆえ、サティルガンのケースは、ただの軽率の類いと判断されたのであろう。

ヌル=デウレットの死と、ほぼ時を同じくして、時代の変わり目となるような出来事がおこった。1502年、メングリ=ギレイのクリミヤ・タタル軍が大オルダの本拠を襲い、大オルダを敗亡に追い込んだ<sup>28)</sup>。長らくクリミヤとロシアの共通の敵となっていた遊牧勢力の消滅である。

1504年、サティルガンは亡き父ヌル=デウレットの遺骨をクリミヤに送る許可をイヴァン3世と叔父メングリ=ギレイに求めた。おそらくは、死期が近づいたヌル=デウレットの、故郷で葬られたいという希望にもとづくのであろう。この願いは聞き届けられ、ヌル=デウレットは、他の多くのカシモフの君主のケースとは異なり、カシモフではなくクリミヤで葬られた<sup>29)</sup>。

イヴァン3世がヌル=デウレットのなきがらのクリミヤへの移送を認めたのはともかく、メングリ=ギレイがこれを受け入れたのはなぜか。さまざまなきさつがあったにせよ、やはり兄弟の情が残っていたというのが、第一に考えられる理由であろうが、それ以外に若干の政治的配慮もあったのではないか。すなわち、クリミヤの人々にヌル=デウレットの死を確かな事実として受け入れさせることである。

正統な君主としての資格をもつ人物が、何らかの理由で王位を去り（あるいはそもそも王位につくことなく）、人々の目のとどきにくい場所で死亡すると、彼の「良き治世」に対する民衆の期待が驚くほどの盛り上がりを見せることがある。我こそは、亡くなったと言われている君主（ないし皇子）であるとして、その名をかたる僭称者に対する熱烈な支持である。近世のロシアは、特にその傾向が顕著で、ヌル=デウレットの死から1世紀後には、ドミートリー皇子の僭称者が、ポーランド軍の支援と、時のツァーリの急死という僥倖により1605年にモスクワでドミートリー1世として帝位についている。史上有名な偽ドミートリーである。

メングリ=ギレイにしても、そこまで極端な展開は想定していなかったであろう。ただ、自分に代わりうるクリミヤ汗の候補として兄ヌル=デウレットの存在を意識しつづけていたメングリ=ギレイにとっては、兄の死がクリミヤの人士の目に明瞭な事実となり、生存説が出てくる余地がなくなるのは、けっして悪い話ではない。その点では、ヌル=デウレットの遺骸がクリミヤから1000キロ以上も離れたカシモフにあるよりも、クリミヤの人々の前で葬られている方が好都合であったのだろう。

父ヌル=デウレットの死を契機に、カシモフ皇国の支配者の座に復帰したサティルガンの治世は長くはつづかなかった。1503年に世を去った父のあとを追うように1506年、サティルガンは死亡する。1490年に父に代わってカシモフ軍をひきいるようになった直後に犯したクリミヤとの連係ミスという失態、外国との秘密交渉が露見しての拘禁、さらに拘禁から解かれたのちも感じざるをえ

なかったであろうモスクワによる監視の目、さまざまな苦難にいろどられた治世であった。

なお、サティルガンの死の前年の1505年には、イヴァン3世が没しており、ロシアでも、その従属国のカシモフでも支配者の交代があいつぐことになった。サティルガンのあとを継いでカシモフ皇国の君主となったのは、弟のジャンナイであるが、彼の在位期間も、さほど長いものではなかった。1512年、ジャンナイは継嗣を残さぬまま死亡する。これによって、クリミヤ汗国出身のヌル=デウレットのカシモフ皇国における王統の系譜は、父と二人の息子、あわせて3代をもって終焉の時を迎えたのである。

#### おわりに

ヌル=デウレットが生きた時代は、東欧の歴史における大きな変革期にあっていた。14世紀までこの地で支配的な地位を占めていたのはキプチャク汗国とリトアニアである。東方より来たったモンゴル人が草原地帯のチュルク系遊牧民を傘下に組み込み巨大な遊牧国家となったキプチャク汗国。バルト海の沿岸部に起こって、南方に大きく勢力を拡張し、かつてのキエフ・ルーシの西部の大半を支配下に収めるにいたったリトアニア。この両大国が、それぞれの内部に、さまざまな動きをみせる諸勢力を抱え込みつつ、かつ結び、かつ離れながら対峙するのを中心として東欧の国際関係が展開した。

キプチャク汗国とリトアニアの動向を基本としていた伝統的な図式に対し、15世紀の東欧においては、さまざまな新興勢力が勃興してきた。その一つが、ロシアであり、諸公国の分立状態を脱すべく、モスクワ大公の主導下に統一と集権化がすすんだ。一方、キプチャク汗国が解体にむかうなか、クリミヤ半島ではハジー=ギレイがクリミヤ汗国を建てて自立し、タタール人世界の分裂をさらに推しすすめた。

時代が移り変わるこうした過渡期にあっては、そこに生きた人物の行動の軌跡にも、新旧の要素がさまざまな濃淡をおびながらあらわれる。ヌル=デウ

レットの場合は、どちらかといえば、伝統色のニュアンスが濃い人物として歴史の表舞台に登場する。1466年にクリミヤ汗となったヌル＝デウレットが、当時キプチャク汗の後継的な立場にあった大オルダの汗にヤルルイクを求めたこと、クリミヤにおける内訌に敗れた後、まずは、かつての東欧の大国であったリトアニアを頼ったこと。これらのヌル＝デウレットの行動は従前の秩序に対する一定の尊重、配慮をうかがわせよう。

これに対し、ロシアにおもむいた後のヌル＝デウレットは、一転して新時代を象徴するような場所に、しかもその君主の座に身を置くことになる。カシモフ皇国である。13世紀以来「タタールのくびき」のもとでキプチャク汗に従属していたロシアは、15世紀の半ばになると、逆にその領内にロシアの君主に従属するタタール人国家であるカシモフ皇国を設立した。この点、カシモフ皇国の誕生はロシアとタタール勢力の力関係が逆転しはじめたことを如実にしめす出来事であり、また、その後、ロシアがタタール人諸国家をあいついで併呑していくにあたっての先例としての役割もはたすことになるであろう。ヌル＝デウレットは、イヴァン3世によってこのカシモフ皇国の支配者の座にすえられたのである。

カシモフの君主となったヌル＝デウレットと彼の息子たちは、クリミヤのメングリ＝ギレイと共闘して大オルダと戦って深刻なダメージを与え、ついに1502年のクリミヤ軍の攻撃で大オルダは滅亡する。一方、大オルダとの戦いを、主としてクリミヤ＝カシモフ勢にまかせたロシアは、西方のリトアニアとの戦いに精力を傾注し西部のルーシ諸公領を統合していった。その結果、東欧ではかつてのキプチャク汗国、リトアニア中心の時代からロシアとクリミヤ汗国を二大勢力とする時代への転換がはたされる。

過渡期を生きたヌル＝デウレットは、クリミヤ汗からカシモフの君主へと立場を変えながら、時代の変わり目におけるタタール側のキーパーソンの一人としての役割をはたしたのである。

注

- 1) クリミヤ汗国時代ならびにロシアによる併合以降のロシア帝国・ソ連内におけるクリミヤ・タタール人の歴史については、A. Fisher, *The Crimean Tatars*, Hoover Institution Press, 1978参照。
- 2) カシモフ皇国については、B. P. Рахимзянов, *Касимовское ханство: 1445-1552: очерки истории*. Казань. 2009参照。
- 3) А. Беляков, *Чингисиды в России XV-XVII веков: просопографическое исследование*. Рязань. 2011.
- 4) わが国でも、宗教問題を中心に、ロシアの君主の支配のもとで暮らすタタール人の問題をあつかった濱本真実氏の『「聖なるロシア」のイスラーム：17—18世紀タタール人の正教改宗』（東京大学出版会，2009年）において、チングス汗の血統者たちに大きな関心が払われている。
- 5) ノガイ・オルダの始祖エディゲイは、キプチャク汗国における第一の実力者であったが、チングス汗の血統者でなかった。このため、彼の子孫であるノガイの首長たちは汗を名のことはできなかった。ノガイ汗国ではなくノガイ・オルダというのは、そのためであり、ここの支配者はベクとして君主の地位についた。
- 6) ロシア史における「タタールのくびき」については、栗生沢猛夫『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』（東京大学出版会，2007年），Charles J. Halperin, *Russia and the Golden Horde: The Mongol impact on medieval Russian history*, Indiana University Press, 1985参照。
- 7) 大オルダについては、В. Трепавлов. *Большая Орда Тахт эли. Очерк истории*. Тула, 2010参照。
- 8) 大オルダのタタール人は、1449年以來、50, 51, 55, 59, 60年と連年のようにロシアに対する襲撃をくりかえした。バジレーヴィチによれば、このたび重なる襲撃は単なる掠奪品や捕虜の獲得を目当てとしていたのではなく、より重要な政治的 목적を藏していた、という。すなわち、タタール人によるロシア支配である（К. Базилевич. *Внешняя политика русского централизованного государства. Вторая половина XV в. М., 1952. с. 53*）。
- 9) マフムードとアフメトの兄弟は、1459年に父クチュク=ムハンマドが死亡した後、大オルダの君主権を分有するようになった。名目的な長の立場にあった兄マフムードは、南ロシアの草原地帯、クリミヤ汗国と境界を接する黒海北岸地帯を支配領域とし、弟のアフメトはサライを含むヴォルガ川の中・下流地域を中心とする東方を支配下に置いた（Р. Ю. Почекаев. *Цари ордынские. Биографии ханов и правителей Золотой Орды*. СПб., 2012. с. 253-54）。
- 10) В. Трепавлов. *Большая Орда*. с. 68-69.



- 11) 1430年代前半にモスクワ大公ヴァシーリー 2世に対してヤルリックを与えたキプチャク汗ウルク=ムハンマドにかわって1438年からクチュク=ムハンマドがサライの主になった。後者の息子がマフムード、アフメトの兄弟である。
- 12) A. Fisher, *The Crimean Tatars*, pp.8-11.
- 13) クリミヤ汗国の内乱への大オルダの介入については В. Трепавлов. *Большая Орда*. с. 68-70参照。大オルダが推したジャンベクの出自については、アフメトの甥ないし息子という説以外に異論もあり、完全に明らかにはなっていない。ベリャコフは、ジャンベクがチンギス汗の血統者ではないという説までであることを示しつつ、彼を一応ギレイ家の一員のうちに数えている (А.Беляков. *Чингисиды в России XV-XVII веков*. с. 58)。ただ、ハジー=ギレイの一族であったとしても、ジャンベクは、ヌル=デウレット、メングリ=ギレイ兄弟のような父の汗位を継承してしかるべき立場にあったわけではなく、傍系の王族であった。こうした人物が、ヌル=デウレットらを押しのけて汗位につこうとすると、もっぱら外部勢力の支援に頼るしかなく、その意味では、大オルダのアフメトのかいらいであった。
- 14) Б. Р. Рахимзянов, *Касимовское ханство*. с. 120.
- 15) ヤギェウォ朝時代の初期は、ヤギェウォがヴワディスワフ 2世として国王になったポーランドに対し、彼の従弟のヴィータウタス (ロシア史上、ヴィトフトとして著名) が大公として支配していたリトアニアは事実上、独立国の状態にあった。これに対し 1440年にリトアニア大公となったヤギェウォの息子カジミエラスが、ポーランド王であった兄の死をうけて1447年にポーランド王カジミエシ 4世になると、両国の同君連合が成立し、以降1492年に彼が没するまでつづいた。
- 16) Р. Ю. Почекаев. *Цари ордынские*. с. 250.
- 17) Б. Р. Рахимзянов, *Касимовское ханство*. с. 120.
- 18) ウグラの対陣については、Н. С. Борисов. *Иван III*. М., 2000. с. 430-45参照。
- 19) アフメトには、10人の息子がいて、そのうち5人が汗の称号を得た (В. Трепавлов. *Большая Орда*. с. 76)。
- 20) 1486—91年にかけてのロシア、クリミヤ汗国と大オルダとの戦いについては、К. Базилевич. *Внешняя политика русского централизованного государства*. с. 208-17参照。
- 21) カザン汗国の汗家の出身者たちとロシアの関係については、А. Беляков. *Чингисиды в России XV-XVII веков*. с. 53-57参照。
- 22) イヴァン3世時代のモスクワとクリミヤ汗国とのあいだの外交文書の様式、使者の受け入れにあたっての典礼などの外交儀礼については、Robert M. Croskey. *The Diplomatic Forms of Ivan III's Relationship with the Crimean Khan*, *Slavic Review*, vol. 43, no. 2, 1984; *Muscovite Diplomatic Practice in the Reign of Ivan III*, 1987参照。

- 23) К. Базилевич. Внешняя политика русского централизованного государства. с. 187-188.
- 24) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство. с. 123, 128.
- 25) Нур=деулеттの血縁者については, А. Беяков. Чингисиды в России XV-XVII веков. с. 57参照。
- 26) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство. с. 129-30.
- 27) Там же. с. 130.
- 28) 大オルダの滅亡と最後の汗, Шейф=アフмедの運命については, В. Трещавлов. Большая Орда. с. 90-98参照。
- 29) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство. с. 127.